石川さんの思い出（１）

写真は卒業生から送ってもらった、今年３月 25 日の人文社会学部「卒業記念パーティ」のものだ。ゼミごとに卒業生から教員への花束が贈呈されたが、私の隣で石川さんが花束を高々と上げているのが印象的である。車椅子でパーティに駆けつけ、嬉しそうに会場を回っていた。そして、ゼミ生から花束をもらった時の嬉しい顔が今でも思い出される。

石川さんが亡くなって、早いもので１ヵ月余りになる。彼にもう会えないと思うと、なんとも寂しいかぎりだ。彼の「思い出」を語っていきたいが、なにから書くか迷う。

まずは今の「思い」から書いてみよう。先日、拙著『災後の新聞』を大量に抱え、汗だくで大学に行った。出来上がったばかりの拙著を元同僚らに読んでもらうために、メールボックスに本を入れた。残念ながら、石川さんのボックスには入れられなかった。

３月末に退職してから、読みたい本を次々に読むとともに、この本の出版に向けて全力投球してきた。「あとがき」にも書いたが、「災後の新聞」という小さな本をまとめようとしたのは、日本社会への危機感からである。昨年末の特定秘密保護法制定から、１ヵ月前の集団的自衛権（他衛権）の行使を容認する閣議決定、さらには原発再稼働をめぐる動きなど、まさに日本社会は岐路に立つ。今の自分になにができるかを考えて、せめて小さな本の出版に全力を挙げることにした。

ほんとうは「最終講義」までに出版して、格好よく参加してもらった人に手渡したかった。研究室の片付けに追われ、そんな余裕もなく時が過ぎた。退職後、集団的自衛権をめぐる動きなど、ますます危機感を深めたことにより出版を急いだ。もう一つ理由があった。それは石川さんのことである。

じつは、この本を石川さんに読んでもらいたかった。この２年間、親密に？付き合ってきて、彼らしい「辛口コメント」を聞きたかった。元気な頃の彼なら、こんな小さな本なら簡単に書ける、論旨が明確でないなどと、きっとコメントしていたであろう。でも、最近の彼は私には？「柔らかく」なっていたので、「甘口コメント」だったかもしれない。

（2014 年８月３日）